

カリタス女子中学校 第四回入学試験

二〇二五年二月三日 実施

国語問題

(五〇分)

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号を字数にふくむこととします。

一

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|-------------------------------|---|-----------------------------|---|-----------------------------|
| ① | 喜び <u>勇</u> んで行進する。 | ② | 反 <u>旗</u> をひるがえす。 | ③ | 古 <u>今</u> 東西の名画。 |
| ④ | い <u>ち</u> よう <u>え</u> んで苦しむ。 | ⑤ | 新商品 <u>の</u> せん <u>で</u> ん。 | ⑥ | こ <u>こ</u> ろ <u>よ</u> い波の音。 |
| ⑦ | け <u>わ</u> しい表情をうかべる。 | | | | |

二 プロダクトデザイナー 秋田道夫氏によって書かれた次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

プロダクトデザイナーが実際のところどんな仕事をしているのか、あまり世間には知られていないような気がします。大昔からあった仕事ではないけれど、それでも ^{さかのほ} 遡れば18世紀後半のイギリスで始まった産業革命の中で生まれたと考えるのが分かりやすいと思います。つまり、 ^A 大量生産品の登場とともに生まれた仕事です。

産業革命では、家内制手工業の時代には作れなかった数の製品を、同じ品質で大量に作るようになりました。それは、一点ものから複製品へのものづくりの変化ですよね。ひとつ良いものを作って、それを複製することで、良いものを世の中に ^{あふ} 溢れさせることができるようになったのです。

最初は設計者や開発者が、その元になるひとつを作っていました。それが美しくないと、美しくないものが大量に出回ることになってしまいます。ならば、美しいものだけを量産すればよいのですが、製造工程や素材、コストや構造など、製品を作るには様々な制約があつて、どんなかたちのものでも自由に作れるというわけではありません。

そのあたりの ^B ^{※あんばい} さじ加減を調整して、いい案配のかたちを提案するのが、工業デザイナーであり、プロダクトデザイナーかなと、わたしは思っています。わたしのデザインにシンプルなたちが多いとすれば、それは部品数が少ない方が費用を安くできるとか、壊れにくくなるとか、そういう都合の結果だったりもするわけです。素材を1グラム減らすだけでも、100万個作るなら100万グラム、つまり1トン減ります。一般に車のデザインなどでも、鉄板の内側をできるだけ削って薄くしています。それは主に設計の仕事ですが、そのように工夫された素材をどう美しく見せるかはデザイナーの仕事になります。さじ加減というのは、そういうことですね。

わたしが言う「デザインは妥協だ」とは、そうした様々な制約やクライアントの思惑、メーカーのブランディングなどを考慮しながら、美しいものを作ることを意味しています。芸術家のように、自らの美意識のままに創作することはできませんが、様々な条件をクリアしながらかたちを考えるのは楽しいことです。

わたしの代名詞とも言えるのが、LED薄型歩行者灯器のデザインです。どうして信号機をデザインすることになったのか、そのきっかけについてお話ししましょう。

そもそも信号機というものをデザイナーがデザインすることは **1** ないでしょう。わたしが信号機をデザインしてから20年近く経ちますが、いまだにわたし以外のデザイナーの名前を聞いたことがありません。

※せんさいいちくう
「千載一遇」ともいうべき仕事は、ほんとうに意外なきっかけで始まりました。

20年ほど前のある日、高校時代の同級生から電話がかかってきました。「大阪のある会社でプロダクトデザイナーを探しているのでやってみませんか」という内容でした。具体的になにをするかも分かりませんでした。連絡先を聞いてその方にメールをし、新大阪駅からほど近いビルにある会社に向かいました。そこで「こういうものを作りたい」と説明していただいたのが、雪を溶かすためのサーチライト（大型ランプ）のようなものでした。想定しているサイズが「信号機のランプ一個分」に近く、そういう製品を量産できる会社はそうなかったため、まさに信号機を作っている会社をお願いするのがよいだろうということで、福岡県の大牟田市にある信号機メーカー「信号電材」に白羽の矢が立ったのです。

それで、大阪の会社の方数人とわたしで実際に信号電材さんに伺って、信号機の組立工場を案内してもらいました。日頃見慣れているはずの信号機が、間近に見るとこんなに大きいものかと単純に驚き、感動を覚えました。たぶん目がキラキラしていたと思います。

2 興味深かったのは、歩行者用信号灯器に使われている「ストップ」と「ゴー」の人型の入った赤と緑の亚克力製のパネルでした。そのパネルがとて「デザイン」に見えたのです。

その日のわたしは、※はため 傍目にはヒーローものに熱中する子どものように映っていたかもしれません。実際、信号電材は信号機好きの子どもの憧れの場所であり、見学を希望する声がひっきりなしに届いているそうです。

その後、作ってもらえる会社も無事に決まり、わたしは「雪を溶かすサーチライト」をデザインしていました。しかしスケッチを渡して以降音沙汰がなくなって、どうしたのかなと思っていたある日、仕事の依頼主ではなく訪問先の信号電材さんから、一本の電話がかかってきました。

歩行者用信号機のデザインをしてほしいとのことでした。信号機を見て目を輝かせていたわたしを覚えていてくださって、**C** 「依頼をするなら信号機に興味を持ってくれている人がよいだろう」ということで、わたしに声をかけてくださったそうです。元々、社内にデザ

イナーがいる会社でもないですし、そもそも信号機をデザイナーにデザインさせるという発想自体が業界全体にないことで、ほんとうに「特別なこと」でした。

信号機もこれまでの電球式からLEDになって輝度^{きど}も上がり、薄くできるようになっていたなかで、社内のあるスタッフの方が「デザイナーに依頼してみたらどうか」と提案してくださったようです。面白いのは、「雪を溶かすサーチライト」のスケッチを見た社長さんが、その時点ではわたしが昔ソニーにいたことをご存^{ぞん}じなかったのに、「なんだかソニーの製品みたいだな」というふうに感じられたのだそうです。

独立してから多くの期間は、社内デザイナーがいるメーカーや、デザイン性が製品の価値を左右する「デザインの必要性」を認めているところで自分の仕事をしてきました。「実用性とレギュレーション（規制）」が重要な要素で、過去のメーカーもデザイナーに依頼をしていない信号機の世界はかなり様子が違い、まずもってデザインの専門用語で説明することが難しい製品を作る仕事をした経験は、すごく勉強になりました。

今になって何冊か本を出すことになったのは、専門用語を使わないで平易な言葉で説明するということを、信号電材さんとの仕事の中で培^{つちか}ったからだと思います。

一般に信号機と呼ばれているランプボックスは、正式には「信号灯器」と呼ばれます。歩行者用なら「歩行者用信号灯器」ですね。そのデザインをすることになったのですが、信号機はとても規制が多い製品ですから、灯器の寸法も光るパネル部のサイズも **3** 決められていますし、その間隔^{かんかく}も決まっています。ぱっと見た感じでは「ほとんどやりようがない」という印象を持ちました。

その「やりようがないものをデザインする」というのが、プロダクトデザインの仕事の面白いところだと感じます。無理難題をどうにかこうにか乗り越^こえて、デザインの力を最大限に発揮できたのが信号機のデザインだったように思います。ポイントは「要素を減らすこと」と「背面のデザイン」でした。

旧来の歩行者用信号機は、光る部分の周囲に、歌舞伎^{※かぶき}の「隈取^{くまどり}」のような段差^{ついで}が付いています。この段差、実用上は必要ないのです。わたしから見ると、かたちを複雑にする要素がひとつ増えているように映りました。そして、その段差と外観の比率が揃^{そろ}っていないから、ちよつと不思議な感じになっています。「かたちは本来どうあるべきか」を考えた時に、これまでの恰好^{かつこう}に揃^{そろ}えるのではなく、気になった **D** 「余刺^{よじよう}」を変えたいと思いました。

そこで、表示パネル周りの段差をなくして、本体のアール（曲面）も揃えました（6ページ図参照）。日頃、信号機をまじまじと見た経験はほとんどないと思いますが、よかつたらインターネットで「歩行者用信号機」を検索（けんさく）してみてください。4 「みんな一緒（いっしょ）」と思っていた歩行者用の信号機にも、メーカーによって結構な違いがあることが分かっていただけだと思います。

もうひとつ大切な改良のお話をする、信号機の本体は、中の発光ユニットを取り替（か）えたり点検をしたりするために、蓋（ふた）が開く構造になっています。その開閉用にヒンジ（ちようつがい）があるのですが、信号電材の製品ではかなり立派なヒンジにし、さらにその大きなかたちが本体と馴染（なじ）むようにするために曲面を付ける工夫をしました。

当初、設計者の方は「デザイナーの方はヒンジや出っ張りをなくしたいですね」と言ってくださったのですが、どうやってもそれが見えないような構造にすることはできないと感じたので、「どうせなくせないなら、ガッツリと出したかたちにしましょう」と提案しました。

こうした、「E」という考え方が、設計者の方から信頼を得るためには重要だったと思います。それは逆に言えば、「デザイナーは無茶を言う人」という認識を、一般的に持たれているということでもあります。

〈秋田道夫『かたちには理由がある』（ハヤカワ新書）より〉

〔語注〕

※案配（あんばい）……………具合や程度。

※クライアント……………依頼主（いらいぬし）。

※ブランディング……………ブランドの価値を高めたり、他との差別化を図ったりする策。

※「千載一遇（せんさいいっぐう）」……………めったにないよい機会。

※傍目（はため）……………周囲の人の目。

※歌舞伎の「隈取り（かまど）」……………輪郭（りんかく）を強調する歌舞伎独特の化粧法（けしょうほう）。

※発光ユニット……………信号機内部にある明かりを点すためのしくみ。

問一

1

4

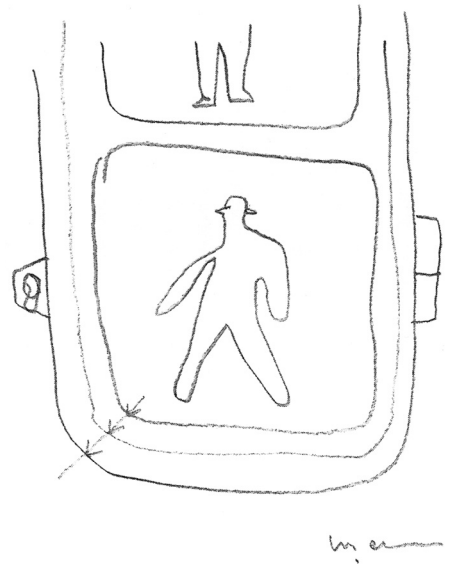
にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア あらかじめ

イ 常々^{つねね}

ウ わけても

エ まず



問二

A

大量生産品 と対比的な（反対の）意味を持つ四字の言葉を本文中からぬき出して書きなさい。

問三

B

さじ加減を調整して とありますが、「さじ加減」とは、さじ（スプーン）を使って量を調整し薬を調合することから転じて、いくつかのことをはかりにかけて取り入れたり減らしたりすることを言います。ここでの「さじ加減を調整して」とは何と何をはかりにかけて調整することを指していますか。答えなさい。

問四 C 「依頼をするなら信号機に興味を持ってくれている人がよいだろう」という「信号電材」の判断に結びついた「筆者のようす」を

比喩表現で述べている部分を本文中からぬき出しなさい。「」のようなようす」という文末表現に合う形で十五字以内でぬき出すこと。

問五 筆者がそれまで手がけてきたデザインと信号機のデザインとの一番大きなちがいは何ですか。本文中の語句を用いて、「それまでのデザインが」であるのに対して信号機は「」という形でちがいがわかるようにまとめて答えなさい。

問六 D 「余剰」とはここでは何を指していますか。一語で答えなさい。

問七 「 E 」に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分に自信を持つ

イ だめなら諦める

ウ わざと無茶をする

エ 諦めるふりをする

オ 自分をおし通す

問八 「ノバラさん」と「シオンさん」がこの文章を読んだ感想を述べ合っています。読んであとの「*問い」に答えなさい。

ノバラ プロダクトデザイナーという仕事がどういうものか、この文章を読んで少しわかった気がする。

シオン デザイナーというとすべて同じなのかと思っていたけど、プロダクトデザインの特別な面が書かれていたよね。いろいろと大変なことがあるんだね。

ノバラ 大変なのは大変なんだろうけど、この文章からは、そういう大変さもふくめて仕事を楽しんでいる、って感じが伝わってくるよね。

一見するとデザインにとってマイナスになるようなことに対しても、否定的に見るんじゃなくてむしろ楽しんで自分のデザインに生かしていく、という筆者らしい仕事への取り組み方は新鮮しんせんだった。

シオン ほんとにそうだね。筆者はすごくポジティブ思考の人なんじゃない？

デザインの専門用語が通用しない他の職種の人とのコミュニケーションについても、「大変だ」とか「苦勞した」ではなく、ポジティブにとらえているものね。

ノバラ 私は理系志望で芸術とかデザインには興味がなかったけど、仕事を最大限に楽しむ生き方はこれからの参考になりそうだな。

*問い

一見するとデザインにとってマイナスになるようなことに対しても、否定的に見るんじゃなくてむしろ楽しんで自分のデザインに生かしていく」と「ノバラさん」が言うのは、具体的には筆者による何のどのようなデザインのことですか。

答えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

「わたし」は小学生の時、母親が仕事に行っている間は近所の喫茶店に預けられていた。「わたし」は店で「タタン」と呼ばれ、常連客や店主から親しまれていた。次に続く話は、「わたし」が大人になって、そのころのことをふり返っている部分である。

彼はサンタ・クロースだった。

よくある話だけれど、隣町の商店街のイベントに雇われていたのだろう。冬休みのその時期になると、毎日、喫茶店にやってきた。なぜあの喫茶店までわざわざコーヒーを飲みに来ていたのかはわからないけれど、季節労働者として雇われた彼はホテル住まいか何かで、雇い主にあてがわれた宿が近くにあったとか、そういう理由かもしれない。

あるいは、隣町の商店街ではサンタ・クロースをさんざんやっているわけだから、おいそれとコーヒーを飲んで休むこともできずに、少し離れたあの場所へ来ていたのかもしれない。

サンタ・クロースの格好はしていなかったはずだけれど、わたしの記憶の中では、彼はいつも赤い帽子に赤いパジャマの上下のようなものを着ている。だっておなかもぽっこりしているし、巨体で 1 した髭が口の周りを覆っていて、彼の風貌はサンタ・クロース以外の何者でもなかった。

〈 中 略 〉

冬休みというのは、そんなに宿題も出なかったし、クリスマスとお正月があったし、ときどき雪が降ったりして、わたしは一年でいちばんいい季節だと思っていた。ただし、わたしが雪好きになったのは、彼と出会って以降のことになる。

なぜならわたしは幼児のころから冷え性で、冬になるとかならずや重度のしもやけに悩まされていたからである。しもやけというのは、ある日とつぜん出現する。寒いなーと思ってこすっていた手足が、いつのまにか感覚をなくし、しびれたようになって存在感を失ったかと思えるのもつかの間、次の瞬間には 2 と血管が圧迫されるような感覚が起こり、該当箇所が赤く膨らんできて、猛烈な痒みが襲い、もう痒み以外のことは何一つ考えられなくなる。それがしもやけである。

冷たいときは痛く、温くなれば痒みに変化する。こうした状態で雪道を歩くのには、尋常ならざる困難が伴うのだった。赤や黄色

のゴム製の子ども用長靴は、雨上がりの日向で水たまりに入ってみるのにこそ適した代物で、積もった雪の中を歩けばたちどころに雪を収集して中で水に変える容器となり果てる。氷水に浸かった足先のしもやけは重症度を増し、いずれ水疱が破れて体液が飛び出し、ぐちゃぐちゃした皮膚がとんでもない痛みを発することになるのだった。

A これはわたしの家では「しもやけが崩れる」という言葉で説明されていて、「崩れ」たら最後、もうそれは痛くて痛くて、とても歩けたものではないし、立っていることすら難しくなるのだった。

「雪↓しもやけ↓崩れ」の法則は、わたしの中ではほとんど百パーセントの確率で起こりうることで学習されていたため、雪の日はぜったいに外になんか出たくなかった。しかしまあ、学校に行くようになれば、出ないというわけにもいかない。両親が共働きの我が家の場合、冬休みであっても家にずっといるということは許されず、朝、母が出勤する時間にいっしょに出かけて喫茶店に行くことになる。母はそこにわたしをあずけて、そして夕刻にまた回収しに現れるのだった。

そして問題は坂である。家から学校までは平坦な道なのでまだいいとしても、わたしは放課後に坂を下って喫茶店に行かなければならない。喫茶店の中は暖かく、いまでもわたしに最大の安心感を与えてくれるところのコーヒー豆の匂いに満ちていて、赤い樽の近くには石油ストーブだつてあったから、冬のたいへんさを忘れるのに悪くない場所だったが、いかんせんそこまではちょっと遠くて、坂はつるつる滑るのだった。

雪が降っている中を歩くのも困難だつたけれど、降った次の日は地面が凍ってしまい、なんだか恐ろしい場所に変身していたのだった。

そんなある日、わたしは耳の後ろで、

「ホーホーホー！」

という声を聴いた。

何事かと思った。振り向くとそこに巨体のサンタ・クロースがいて、

「ホーホーホー！」

B と叫ぶなりわたしをつかまえて、滑り出したのだった。

彼は櫓を持っていた。櫓というか、板切れというか、なんだかそんなようなものだ。彼は、こわごわ雪の上で足をちよつとずつ動かし

ているわたしを、あつという間に抱きかかえると、なぜだかその櫂状のものの上に座り込み、

「ホーホーホー！」

と笑いながら一気に坂を滑り降りたのだった。

ざざっと雪をかきわけて坂の下までたどり着くと、今度は櫂を肩に担ぎあげた。

「店に行くんだろ」

そう、サンタ・クロースは言った。

「行こうぜ、こっからは歩きだ」

ほんとうに彼がこんなふうに言ったのかどうか、心もとなくなってきた。というのも、彼はほんとうに、外国人の顔をしていて、店ではほとんど日本語をしゃべらなかったからだ。

でもまあ、こんなことは言っても言わなくても態度で示せばわかることだった。彼は店に向かって歩き出した。わたしは彼の後をついて歩いた。

心の底から驚いたわりには、不安も不満も芽生えなかったのは、彼とはすでに店の中で遭遇していて、誰だか知っていたからだろう。ほんとうを言えば、両親と隣町に買い物に出たときにショッピングセンターに座っているのを見かけたことがあり、そのあと店であったときに、挨拶をした仲ではあったのだった。

樽の中から見つめると、彼はにつこりした。ショッピングセンターでよいこといっしょに写真を撮っていたときと同じ顔だった。

おそろくわたしの表情に、「前に会いましたね」というサインを見て取ったのだろう。彼は何かわたしに話しかけようとしたが、たぶん、何も言わなかった。言ったとしたら、

「ホーホーホー！」

だったはずだ。でも、わたしは彼の言いたいことがほわかった。わたしたちは一瞬にして理解しあったのだ。

顔見知りでお互いに親しみを感じてはいたものの、最初に後ろから抱きつかれて坂を櫂で下ったときは、ほんとうに驚いた。それこそ、誰かに見られたらまずい光景だったのではないだろうか。しかし、幸いなことに、わたしと彼が櫂で坂を下りた件については、誰も警察に通報しなかった。雪があるうちは、彼は何度も滑ったし、わたしと彼がそのようにして雪の日をともに過ごしたのは一年だけではなかつ

たと記憶するけれども、正確に、何度そうしたか問われると答えに窮する。十二月の雪はそう毎年あることでもないし、ひよっとしたら二、三回程度のことだったのかもしれない。

ともかく、彼と一緒に坂の下についた途端に、わたしは何かを悟ったような心境になった。つまり、人は雪道を、歩かずに滑るということだってできるのだと。とくにそれが坂の場合はなおさら。足ではなく、尻で移動してなぜいけない？

わたしたちはそれから仲良く喫茶店に行き、それぞれお気に入りの位置に腰を落着けた。

〈中略〉

わたしがサンタに会えたのは、たぶん、小学校の一年生と二年生のときだ。なにを話したというわけでもないけれども、雪と紅葉と木について、よく話した。それから、しもやけについて。

〈中略〉

「わたし」が三年生、四年生の冬休みには、サンタ・クロースは喫茶店に現れなかった。五年生の冬休みには、「わたし」はサンタ・クロースのことを気にしていなかったが、喫茶店に行くと、マスターが金色のリボンのついた赤い袋を「わたし」に差し出してきた。

「三年くらいまえに、冬になると来てた商店街のサンタ・クロース、覚えてるかな？」

「覚えてる」

「あの人が店に来た。昨日の夜。タタンが帰ったあと」

「来たの！」

「仕事じゃないみたいだけどね。急いでたし」

「なにしに来たの？」

「懐かしかったから寄ったんだって。で、これ置いてった」

「わたしに？」

「そう。樽の中に座ってた子にあげてほしいって」

D わたしはマスターの手から袋をひったくり、そつとテープを外して開けた。中からは靴下が二足と、小さなビニール袋に入った赤い乾燥した植物の碎いたものが入っていた。

わたしが怪訝そうな顔を見ると、マスターは思い出したようにレジ脇に貼り付けたメモを取って、眼鏡を鼻まで引きずり下ろした。

「これ」

「なに？」

「これも置いてった」

わたしは彼の手元にあるメモをひったくった。そこには足の絵があり、親指だけ強調してあって「problem」と書いてある。矢印を追うと、その足が一足の靴下を履き、もう一足の左右それぞれに袋に入ったものを入れて、その何かが入った靴下を重ねて履く様子が漫画のように描かれていた。

※
RUN!

最後に英語でそれだけ書いてあったので、わたしとマスターは首を捻った。

「まず、こっちの薄いほうの靴下を履くのね。それから、こっちの厚いほうの靴下の中にこれを入れて。なに、これ？」

「トウガラシに見えるけどね」

「トウガラシ？」

「オレの知る限りじゃ、トウガラシにいちばん似てる」

「そしてこのトウガラシ入りの靴下を重ね履きすると」

足に **3** と妙な感触があつて、けつして履き心地がいいとはいえないそれを履いてみたが、何も特別なことは起こらなかった。

「それより、プロブレムってなんだ？ 足に怪我でもしてんのか？」

マスターはサイフォン用のランプにアルコールをつぎ足しながら、わたしに聞いた。

「怪我はしてないけど、しもやけが」

わたしはそのときはっと気がついた。これはひょっとして、「しもやけと友達になる方法」なのではないか。

4 とドアの鈴^{すず}を鳴らして、老小説家が店に入ってきた。

「おう」

と、彼は手を挙げた。

「なあ、いまそこで、[※]ジェシーに会ったぜ」

「あれ、もう帰ったと思ってたけど」

「ああ、もう帰るんだって。今日の午後の飛行機で」

わたしは店を飛び出した。

べつになにをどうしたいわけでもなかったが、^Eいま会えなければ永遠に会えないだろうと思ったからだ。

その日、雪は降っていなかったけれども、空気は凍るように寒かった。足先は例のごとく感覚がなかった。でも、ほかに^{せんたくし}選択肢も思いつかず、わたしは一気に坂を駆け上がった。学校や病院に近い大通りのほうに出てみたが、彼の姿は見えなかった。わたしは坂を駆け下りて店を通り越^こし、神社のほうに回ってみた。そこにも彼は見えなかった。神社の裏には大きな^{いちよう}銀杏の木があつて、好きだと言ったことがあつたのを思い出してそこまで走った。

するとどうしたことか、だんだんだんだん足先がじんじんと温まってきたのはいいが、立っているのが困難なくらいに痛くなってきた。それも、しもやけの痛さとはまたべつの、火がついているような痛さに襲われた。

わたしははじかれたように走り出した。今度は彼を探すために走っているのか、足をひとところに落ち着けておくことができずに走っているのかわからなくなった。靴下を脱^ぬげばこの痛みから解放されるのだと気づくまでの間に、わたしはもうさんざんそこいらじゅうを走り回っていた。

〈中島京子『樽とタタン』（新潮文庫）より〉

〔語注〕

※尋常ならざる……ふつうではない、当たり前ではない。

※水疱……すいほう 水ぶくれ。

※problem……英語で「問題」という意味。解決が難しかったり悩ましかったりする事柄に対して用いる。

※Run……英語で「走れ!」という意味。

※サイフォン……コーヒーをいれるために使う道具。

※ジェシー……喫茶店の常連客たちは、サンタのことを「ジェシー」と呼んでいた。

問一

1

4

にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア	ちりんちりん	イ	じんじん	ウ	ばたんばたん	エ	がさがさ
オ	ぼとりぼとり	カ	もくもく	キ	もじやもじや	ク	ちよこちよこ

問二

A
これ が指す内容を四十字以内で書きなさい。

問三

B
叫ぶなり の意味としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	叫ばずに	イ	叫ぶ前に	ウ	叫ぶとすぐに	エ	叫ぶこともできず	オ	叫ぶふりをして
---	------	---	------	---	--------	---	----------	---	---------

問四

C

わたしは何かを悟^{さと}ったような心境になった。 について、「シオンさん」と「ノバラさん」が話し合っています。この会話を讀んであとの(1)～(3)に答えなさい。

シオン なぜここでは「知った」「気づいた」という表現ではなく、「悟った」という表現が使われているのかな？

ノバラ 「悟る」の意味を辞書で引いてみたよ。「悟る」には、【 i 】という意味があるそうだよ。

シオン ただ単に「知る」「気づく」以上の意味があるんだね。ここは、【 ii 】という方法を「わたし」がサンタ・クロースに導かれるままに実行してしまった場面だったよね。

ノバラ その方法が、「わたし」にとって 【 iii 】 どのような移動の仕方だったからこそ、「悟った」という表現になっていると考えられるね。

シオン どうすればいいな思いをせずに冬の道を歩けるのか考えながらも、その解決策が思いうかばずになやんでいた時に、思いがけない形で解決方法を教えてもらったんだね。

ノバラ サンタ・クロースが言葉で説明するのではなく、「わたし」を抱きかかえて櫓に乗って移動したことにも、大きなおどろきがあったはずだね。そのおどろきや緊張^{きんちやう}がまだまだ続いている中で「悟った」という段階になっているわけだね。

(1) 「 i 」に入る内容としてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かねてからの希望を達成する

イ かくされているものを察知する

ウ 物事の本当の意味を知る

エ 自分の運命や使命に気づく

オ はつきりと理解する

(2) 「 ii 」に入る表現を本文中から十字でぬき出して書きなさい。

(3) 「 iii 」に入る内容としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまでの想像通りに進めて、安心できる

イ これまでの常識をくつがえす、びつくりする

ウ これからの未来を予想し、わくわくする

エ これまでの幼さに気づき、反省させる

オ これからの楽しみを取り消し、がっかりする

問五

D わたしはマスターの手から袋をひったくり、そつとテープを外して開けた。とありますが、「袋をひったくり」という行動をした時と「そつとテープを外して」という行動をした時とは、「わたし」の気持ちはちがっていると考えられます。それぞれの行動をした時の「わたし」の気持ちを説明しなさい。

問六

E いま会えなければ永遠に会えないだろう とありますが、あなたがここでの「わたし」だったとしたら、サンタ・クロースに会ってどのような話をしたいですか。わかりやすく具体的に書きなさい。

国語の問題はこれで終わりです。

